### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	利子論上に於ける貨幣数量説(二)
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.4 (1917. 4) ,p.554(126)- 577(149)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170401-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

爲に 居たのである。嗚呼、然しながら潜國民よる上全なる自家の發展を遂ぐることに利益を有つて の制版的 て社會的及び産業的問題を解決し、 めて完全なる政治的関 なくして、 來さうであつた。 巴が遂行せ 硬なる形式を以て頭 の政治的境界を整理し得なかつたのである。 V いて居る。 目疾視を残した爭鬪に恕へずしては、各である。嗚呼、然しながら諸國民は痛ま 國民主義は軍國 會的及び產業的 の上に立つたる 状態に 集団とな 何れも第 ねばならぬ ては不可能であった方法を用ひ 當時に於て つて了 諸國民は未だ敵對の間 一には從來の を擡げ來り、 體を造り、 權力の均衡である、 業の つた。 義の衣服を着 題は未解決の儘に 此の 織である」 第二には當時 如き解決も出 以て一層完 けて一層 柄では 殘さ ど彼 たる

## 數量說 利子論上に於け =

## 次

幣説を懐く の説を紹介せんと欲するものなるが、此貨 就きて、 は前節に於て利 者は非貨幣説を固持する者よりは適 我經濟學界を支配せる思想は 宁 合と貨幣數量との 0)

ざるなり。 置せんと努むる者は更に 利子歩合に對す は利子步合が するはマクラッド、クラインベセ と論じてい トの所説 加之、 て吾 非貨幣説を探らずで云ひ得るに過ぎ ラッド、クラインベルター並にデブンポ以下吾人の紹介し且つ批評せんと欲 なりとす。 貨幣の需用供給に定まるものなり 0 少数の貨 る貨幣數量の影響を積極的に立 の貨幣數量論者中に於せる非貨幣説なるが如 一層少數に して、 き観 多く  $\mathcal{T}$ 

# マクラッドの説

等の英國の經濟學者が利子歩合に及ぼす貨幣 學者たるヘン 貨幣の數量が利子步合に影響を與ふることある 量の影響を否定せるに ヴスミス並にヒュー と矛盾でを指摘せる後(註、一) に紹介せるが リー・ダニング・マクラッド は其大著『經濟哲理』に於て先 の唱へたる 貨幣説 反し、 E 1 同じく英國 4 流通貨幣の膨 スミス、 ・は極力 の經濟 0) 3 誤謬

個の異 に増加せ 購入に 買に充てられ、一部は有價證券の購入に用ひ而して、若し貨幣增加額の一部は貨物の購 般に騰貴せし 購入なりとす。 換言す の變動を蒙らざる可し。 せば、有價證券の價格は必然的に騰貴す可し。 脹額が全部有價證券の購入に ふる影響に就 たりとせば、 用 の購買にして、他は有價證券(deれる目的に使用せらる)ことあ 0 れば、利子歩合は下落するに至る可し。 使用さ 見せしむるに在りて、 ひられ、 可きは勿論なり n 若し貨幣増加額が全部貨物の 而かも貨物の供給が同比例 貸物並に有價證券兩者の價 其唯一の結果は物價を一 せし際には其増加額が一 他は有價證券(debts)の されど若し貨幣の膨 さす。 利子歩合は何等 利用せらるゝど 唯其際に b ば 於

の変あるのみ』と。

-。(主)三、マ氏は更に金が國内に流入せし際原則の二例なりで斷言せしを以ても知を得るな説せんとせるかは氏が兩關係を以て經濟學の大。氏が如何に此貨幣對物價並に利子の關係を力るも、系引封をに生す。 為めに手 も手形の割引を増加せんと欲せば、 引するに在るを以て、 に於ける影響を論じて曰く、 充てらる せば、 る 響を蒙らず、 せらるうものなるが、 ģ 利子歩合は低落するも 物價は騰貴するも、 げざる可か の使用の如何に ことせば、 額が貨物の クラッ 又其全部が有價證券の購入に らず。 加を圖るに 物價は 購買に全部 此金の新供給を利用する 銀行の業務は手形 依り 何等の 利子歩合は L 金は常に銀行に て之を區 て割 至る 勢ひ せらること を受け 何等の影 結果をば 加か 8 集 2.

> ざれば、 本は増加 至らば利子歩合は再び從前の率に戻るに至る 然り雖も と。(註、四) 物價は爲めに騰貴するに至らん。事若し茲に其上膨脹するも企業は最早何等の刺戟を蒙ら 企業の 業盛んどなり、企業旺盛とならば、 す 貨幣の製量にして益々増加して \$ 17 膨脹は遂に其極點に達し、 り、物價は騰貴せざるなり 事者し弦に 貨幣 \$

れども、 騰貴が して騰貴 間生産財が夫れに對する<br />
需用の膨脹せる<br />
結果と のに ざるは勿論、 低落せば、 る原因は **亦騰貴するに至らずや。** に於ては勞力の需用増加 しと論ずれざ、 して、 時に貨物の生産が増 利子歩合の下落以上 歩合の關係を充分に 吾人は未だマクラッ のなることを看過せる 貨物の生産には多少の す可きは自然の 利子歩合の下落のみに非ずし 勞働者 す可 企業盛んとな 或は却つて下落することある可 はざるを遺憾と けれ 果して然る哉。 旺盛さなり、 0 の消費する貨物の市価がせる為めに勞働者の 加せば、 れば、 物價は騰貴することな 数ならずや。 マ氏は又企業を刺戟す に企業の膨脹を促進 企業旺盛さならば、 明せるも 企業に用 時日を要するも 企業が盛んなる 物價は騰貴せ 説を以て貨幣 叉 て、 0 そは兎も ゆる所 なりと の收 價 V B

計 ] 'Henry Dunning Macleod J: The Princicles of Econ mical Philosophy, second edition (1875), Vol. II,

pp. 89-90.

描门、Ibid., p. 84-7. 描门、Ibid., p. 89,

描图 Tbid., pp. 87-8.

第二款 クラインベーターの説

り。氏曰く(註) という。氏曰く(註) という。氏曰く(註) という。だっちにはればす貨幣數量の影響を明白に認めたる者あり。を以撃する為めにはあらねども、利子步合に及を駁撃する為めにはホらねども、利子步合に及を駁撃する為めにはマクラッドの如く非貨幣説

生ずる利潤の如何に依りて定まるものにしてなりて定まるものなりと云ふこさを得るなり即ち國内に於ける融通資金の供給多ければ、即ち國内に於ける融通資金の供給多ければ、即ち國内に於ける融通資金の供給多ければ、なければ、反對の結果を呈するものなりとす。

其需用多け れば、金利は高く、 其需用少なけ

於ける利子歩合の高低に論及せざるを以て、 とを得ず。且つ氏は貨幣流通額が膨脹せし際に貨幣説を積極的に支持するものなりと看做すこ 合との間に於ける關係を闡明るることを得ざる めに試みられしものならざるが故に、 ク氏の説く | 逝せる所を以ては貨幣流通額其物と利子步 前かも、 ば 氏の所論は非貨幣説を反駁する為 所は簡にして要を盡せり 定まるものなり」と。 必ずしも と云ふ 氏

Friedrich Kleinwächter: Lehrbuch der Nationalökonmie (1902), S. 405.

於で利子の本質を説明して曰く、(註、一) 大學教授デブンポー 企業經濟の研究を以て知らる~米國ミヅ第三款 デブンポートの説 は其著『企業經濟學』に

『普通に行はる 貸借の形式は單に甲の現金

> するか、若しくは滿期さなれる債務を決濟せ又一囘の利用に依りて消滅する享樂財を購入期間の使用に堪ゆる享樂財を求むるか、或は 在り。 んが爲めなりとす。」 は投機事業の資金を調達する為めか、或は長借するか、或は製造の原料を買入れるか、或營業特許權又は專賣特許權を購入若しくは賃 の如く 對して乙が甲に支拂ふ報償に外ならず。 幣の代用物) よりは寧ろ今日甲が乙に購買力(貨幣又は貨在り。・・・・而して利子は翌日、翌月又は翌年所有高を減少して乙の所有高は之を加ふるに 乙が購買力を借用するは器械、 を利用 するの權利を與へたるに 器具、 斯く

に、デブンポ をば貨幣 産資本に對して支排はるこものなりと看做せる 多數經濟學者が尚は今日に於ても利子をば生 又は貨幣の代用物の使用 ト氏が上文に示せるが如く利子 ぜるは聊か吾 に對 人の意す して支排

闘聯せる一問題なりどの意見を有するものなる 於て貨幣説に傾けるを以て利子步合論に於て (註二) 利子歩合の高低を論ずるに當りて此 地よりして推斷して曰く、(註、三) 氏は 金の供給並に利子步合は寧ろ銀行業に 一定の時及び一定の事情の下に於け せる見地に立 の常然

緩慢、 は信用)を潤澤に爲しつゝあるときには、金融 要具の缺乏の為めに利子歩合は騰貴す。 『銀行が其顧客の便宜を圖りて通貨 する通貨 **~**つ 銀行が貸進りつゝある際に 融通資金豊富にして、 **副通資金豐富にして、物價は既に騰貴** (貨幣又は信用) 並に一般の交換資識りつゝある際には、銀行の供 (貨幣叉

72 子步合に一大影響を及ぼすことあるを認 吾人はデ氏が 貨幣の供

> さす。 る變動を蒙る可きかを明確に詳 貨幣其物のみが増減せる際に利子步合が 論せどり 加何な

Enterprise, 1913, p. 356 Joseph Davenport

掘川、Ibid., p. 350.

溢川、Ibid., P. 357.

### 第三節 折 変訛

幣説に偏せず又貨幣説にも私せずして比較的穩 健の説を懐ける者妙なからず。 し且つ批評せんと欲するはカ セリグマンつジョン 貨幣の數量で利子歩合との關係に ー・ニューコー ソン、 ム、ニコルソン、ハド 沙 K ンチョン、バジャト、 茲に吾人の紹介 0 折衷説なり 就きて非貨 レイ、

カンチ ヨンの説

巴里に銀行業を營みし英國人なるが、 ド・カン・ヨンは十八世 紀初年に於て 其死後遺

融通を求めたるが爲めなり。 排ふことを得るを豫期して、株券購入資金の 参額の配當を得て上記高率の利子を容易に支 せしは倫敦人が南洋經營事業の出資者と爲り

影響を認めたるも、 利子歩合は昂騰するに至るを以てなり せば、 擴張は資金の需 し消費の増進は企業の擴張を促が 5 の貨幣所有額の膨脹より來れるものなりと す たる現象なりとせば、 されど、 可きい由 力 に必ずも利子歩合の低 ンチ 全く正反對 貨幣の膨脹 3 若し流通貨幣の増加 ン 9 用を膨脹せしむ の結果を生ずるならん。 利子歩合は従つて低落す 利子歩合に及ぼす通貨伸 が資金の供給者 氏の説に據れば、 資金 (一)資金の供 落を來たざるな 0 可 供 きに由り を通じて い給は自ら L が消費者階 الح الح 貨幣 企業の 蓋 可增起 0)

供給者 步合 するも るの 保有額 す可 せざる 7 むるは單に一時的の現象た給者の貨幣保有高の膨脹が されど、 の騰貴を齎す傾向 鵬 , 30 mg. のあり 傾向 が増加 uj 久に金利を低下 からず を有す可きは 第一の 利子歩合の下落は せる ぜり。 際に、 假定 V, を誘致し、企業の擴張はは物價の騰貴を促進し、 を有す可きを以て、 資金常用 銀行並に貸 力 0 せしむる ン チ 3 利子歩合を低落せ 子 資金 步合 に止せる ヨ は の増進は利子企業の擴張は ことなさを記し止まるものに ンの所論の 金業者 の貨借 カジ 却つて騰 合 資金 の貨 F は 10

の結果に論及せるには非ずと辯じてカンチョン幣増加の一時的影響に外ならずして、第二次的輸者或はカンチョンの指摘せんと欲せるは貨

幣にして増 響に の 下 す可きに依り、 費膨脹 結局騰貴することあるはカン j-の説 75. 50 7) 12 9 T 8 ン 加 の假定せし如 階級に せば、 n 家のみに非 屬 貨物の消費膨脹」 然らば、 步合 質は然らざる みる れば、 する者で雖も の第 く増加せる際に 8 次的 一銭の借 を奈何 Ļ 中に在る貨 ずし 果のみを指 者は常 貨物 せん。 て寧ろ 於ける 0

夫れ 全部 3 を借入る 金錢借 文け收縮 の貨幣 するの 結果を呈す可けれ 3 力多 資金 せば、 て、若 の一般需 ばなり。 級内に は自

す可きは きて旣 歩を進めて吾人の論題を考究せしならば、 後今日に至る迄の幾多無益の論爭を豫防するを ならざり は多數經濟學者と異なり經濟界の實情に通曉せ 此兩者を混同せるの一事に存せり。カンチョンと第二次的影響との區別を立つることを忘却し に優り し時 の影響を認 を以て、 要するに、 ŤZ 代 31 る見解 なりしにも拘らず、 71 ス 未だ經濟學が ンチ ミス のあり 7) め 以前 H を有せしものなるが、 ン かが 利子歩合を貨幣との關係に就 チ に於てスミス Ħ Ŋ 貨幣膨脹の第一次的影響 ~ ~ は金利に及ぼす通貨 チ 織的に研究せられざ 其洞察力の甚だ凡  $\exists$ 並に して 唯遺憾と Ŀ 若し 1 其以 1 2,

> 岩 Richard Cantillon: Essai sur la nature du commerce en général, 1755 (Harvard Reprint), pp. 282-4.

## 第二款 バジョトの説

貨の となれ するが故に、此點よりしても資金の需用膨脹し、 有價證券の騰貴に 依り(一)各商人は以前 紙幣を増發せりとせんか、 を要する結果として、 の現象たるに止 つて は 内國に於ける物價騰貴は貨物の輸入を刺戟 其著 膨脹の結果として低落する 利子歩合は再び昂騰するに至るのみなら ば、 の研 0 假りに紙幣發行權を獨占せる銀行 して利子步合を引上げしむるに至 究者として其名東西に IJ 加は正 ンバ まるものなりと論例せり。 依りて債務 ド街」に於て利子 で債務者の借財能力増進賃付の要求増加して二) よりも 物價は騰貴す可きに を酸 取引 ģ. に多くの資金 ζ. 正貨の流 ・步合が通 以 Ÿ 如 が何

なり。 りも多額の資金を要する 金需用の増加は遂に利子步合を騰貴 企業の利潤増加 結果を呈するが放なりです 價 物價 加 4 しに因づくものに非ずして、物價騰貴せばせし結果として銀行に貸付を請求する者增證券の市價騰貴せしが為めに其借財能力の しに因づく 然りと雖も、 企業の膨脹は資金の需 歩合も t そは各 企業 する の利潤 Ď 又は其所 人が取引に從前 の増進は を増大 せし する 有 に係る 企業 むる 3 B ţ 0) 力等 8

싎 Walter Bagehot; Lombard Street, 5 th ed., 1882, pp. 115-8.

# 第三款 ヴォーカーの説

多大の貢獻を為したるフランシス・エー・ウォーて之を獨立の地位に置くの氣運を促進する上に同國の經濟學をば英國正統派の羈絆より脱しめ米國に於ける最初の經濟學者の一人にして、

氏の所論の梗概は左の如し。(註)の關係に就きて一種の折衷的議論を試みたり。カー氏は其著『貨幣論』に於て貨幣と利子步合と

貨幣は一物だも生むことなければなり。 少当 意見の誤れるを知るに足らん 歩合を永久に低落せしむることを得可しとの を以て観ても、 の有無大小に比して生産資本の供給が多き 非ず。 子步合 實際に貸借せらるゝものは資本にして貨幣 かに 蓋し資本は何物かを生産すれども、 の高低は資本を有利に運轉する機會 りて定まるものなりとす、 貨幣の 供給を増加 *b*, 要するに、 すれば利子 是れ か

利子歩合の平均率は斯くの に亘 さに依 權者と債務者と としては敷日間、敷週間否な敷 b 7 まるもの 7 爲めに 於て資本 なり 伽 で令資本 ど跳 一幣が、 B の需 の鍵 15

即ちウォーカーの党に蒙しばいってででした。いの事情に起因するものなりとす。債務決済の要具として尚一層廣く利用せらるするの一手段とし用ひらるゝのみならず(二)

する 及とを利用 して何 關係に依 ことありと。されど、ウォー Ţ. 獣皮と 力とは果して何を指すものなるや。 察す 的に之を論ずれば、資本 B 一物だも生産せざるに資本は 5 を收 をか造り得るか。靴工 のなりと論すれども、 の生産 n ウォ 等 ば りて定まるものなる 梦 の資本が生産力を有すると看 谷 3 \$5 て靴を製造するを得 貨幣の流通額に依りて變動を蒙る 力と其供給さの間に於ける數量的 の説に據れば、利子步 立 元に何 生産資本を利用して る 力 器械は夫れ 生産力を有するに が靴裁縫器 1の所 から るも 何物 一時 訓 原 ウ氏 資本の 2 的 料 其器械 を生産 械と獣 自身果 に之を 等 さる 0 生 生根

同日に (生産財)との ることあ り之を観れば、 要するに、 依りて若干の利 之を以て商業經 術的生産にも貢献 なきのみ は夫れ自身に於ては勿論何 次にウ る技術上の相違をば經濟上 是れ 貨幣と器械叉は原 意味 と云は い論ず可 b なら に於て の論 然るにウォーカーは、兩者は殆んど同 して利子歩合に對 からざれざも J' 構の徹 營の資 益を收むることを得れ 一業技術 するこ 器械又は原料の からず 货 底せざる 料 金に充つれば、 となけ 0 的見地より之を論ずれ 如き 如何となれば、 に於ける差異なる 經濟上の立脚地よ でいる貨幣で資本 理由の れども、 所謂 は此兩者間に存 一の效用を有す 如く 生産財とは 造すること T ばなり 其利用に 、貨物の技 ---なり。 利子步 假りに 0

に定まる とは果して孰れが して とせ 產 3 は殆 4 0) かぎ 然らば、 貨 力に依りて定 關係を精密 Œ 此 合 一鵠を得 する め 力に よりも 幣の流通額に依りて左右せらるゝ んご毎日變動するものなるを以て、 利子步合 依り たる 永久 かゞ 的 办了 如 りて定まる 金融市 て定まる たる説なり 利子歩合は或は に論述 的 如 る は常に まるものなりとするも、 重要なるか。 0 < 利子步 場に於て 利子歩合は 金 利 せざり 其影 とす かぎ 合 數週又は數 の金利 響を蒙る 3 ४ し 却つて永久的の の根本的に 假命ウ氏の利 30 要なる 時的利子 貨幣 8 0) b b ケ 資本 B 月 若し のな 12 3 T 0 步 12 若 日 流 0) ッ 17 3 を占 利れな 合 な 且 存 通 **F** 0 貨

是れ氏の利子論の徹底せざる理由の第二なり

f Francis A. Walker : Money, 1883, pp. 94-98.

# 第四款 ニューコームの説

他の經濟 紀中 にし 般人士に其名を知らる なき動 點に於て地 を公に 十六年中 73. 於ても を有せざ C 17. 3 於 問題に 物 43 17 生存 H 0) 6 球上 ウ 3 著述を繙く 2 學に 著者 關する論文を發表せしが、 世 x. して の説 經濟學 17. IV h も趣味を有し、 住める人類に優るとも劣 と共に火星の表面には は今回 爲めなるか が天文學者にして經濟 との説を唱 なり。 と欲するは米 0 0 の天文學者に 、氏は又頗る多方で説を唱へたるが為る 原 が理を講述 <u>...</u> 時述せる一著 貨幣並に其 =1 は 爲め 7. 4 1 學界 M 智識 は 0) 10 3

第四號

大要左の なる意 て著は するの 則 の獨創的 みたる貨幣對利子歩台 3 述に於て且つ殊に貨幣並に物價に關する B 如し。(註) 観あ > 上記の 研究に くなるも、 忌れ 於 物は經濟 7 られたる好著に 埧. 門大家 氏が 10 種の 建の 0 地の壘 3 隠塵さし 於て氏 截 窕 Y 伙 0

利子歩合は貨幣の需用と供給とに依りて定まるものなり。然りと雖も、貨幣の使用に對して支排はるゝ利子の歩合は根本的に云へば貨幣其物の效用に依りて定まるものに非ずして、貨幣を以て購入せらるゝ生産財が製造家て、貨幣を以て購入せらるゝ生産財が製造家で、貨幣を以て購入せらるゝ生産財が製造家のなりとす。

とせるに相似たり。されど、貨幣對利子步合のカーが資本の生産力を以て利子步合を説明せん本的原因を生産財の效用に求めるたるはウォーサイモン・ニューコームが利子步合を定むる根

於ては せると利子歩合決定の 論心り。 云はざる] 的に定まるも きたるに反し、ニュー 以て通貨の 唯、ニュー 利子歩合に及ぼす小 に正確なるとは 係に に之を 用供給に 貨幣のみを通じて行 假令利子歩合が如何なる原因に (信用制度を一時無視するさせば) 的に 此 きて耐 可からず。 通貨伸縮 **:** 後者の利子論が 需給關係に依りて め 依りて定まるは自明の理なりとす のな んとせる ムの利子歩合論の缺點とす可き 弦に喋々 9 0 とするも、 **=** 0 ちゥ 本 る > 的原 流通の影響を度外視 するを須ひざる所な 前者の所説よりも遊 は日常の利子歩合を **3** を蒙ることあ 中 定まるも 或る 71 をは生産 壊の差 一定の時に依りて根本 は利 正し貸借は のなりと ざる りと説 子步 0

試 Simon Newcomb: Principles of Political Economy 1886; pp. 304-6.

# 第五款 ニコルソンの説

『經濟學概論』に於て利子 約なることを指摘 て支拂はるゝ利子は長期 のとの二種となし、 まる 融界に於ける信用の狀態、(二) と供給とに依 貨幣の融通に 必要とする貨幣の融通に對し に對して支拂はるゝもので債務決濟 不足並に(三)商業界の景況 對して折衷的態度を採れ なり b 對 の巨星 で定まり、 し、資本の利子は資本の需用 して支排はゝ 前者即ち資本の利用 の契約 を別ち 貨幣の ソ ) 銀行支拂準備金幣の利子は(一)金 利子は短 て支排 17 て資本 b B 何に依 して、 はるゝ 後者即 に對し (生産 期 0 は b 爲 其の の契 T 8 B

に分ち單に債務決濟の目的を以て行はるゝ貸借即ちニコルソンは貸借を長期と短期との二種

亦必ずし 憾あり。 期とに分類するは金融界 はる 公債に めに行はるゝものに非ざると同時に るものに非ず。營利會社が社債の借替を爲し、 > かゞ かゞ 業資金を調達する為めに と看 貸借をば斯 で商品の 借替へるが如 入を目 契約を結ぶ 大藏省證券、 長 も常に債務決濟上の必要に依り成立す ずや の融通 期賃借は必ずしも事業資金調達の為 仕入の為め、 を長 ものに非ずして何ぞや。如きは債務決濟の為めに 0 國庫債券又は舊國債を長期 ч. 的東手形 如き標準を以て長期と短 貸借と称 若しくは製造家 狀と合致せざるの 短 型期の借いを振出 せる ずる為め 為めに長 短期 なり。 すは新た 入 貨借も をなす 叉 が原 3 圳

首肯し難き點少からず。氏は資本の利子を以て此缺陷を有せるを以て、其論構の全部に亘つて止いいンン氏の利子論は既に其出發點に於て

ざる の效用高ければ、 ける報償 財の效用の高低は夫れ 利子に非ず。 も亦高く定めらるゝの傾向を有す可きもつ 得るや。 給とに依りて定まるならんも、 物の使用に對して支拂はるゝ報 以て、 論ず むる 別の需 和 0 結果を呈すること絶無なりと云ふを得ざ 依りて特に多額の利潤を收むること能は かず 如 . To 10 如きことなし。 は其生産財の賃貸料にして吾人の所謂 生産財其物が賃借せらるくならば、 何に 借入資金を運用して事業を經營す と供給に依りて定まるのなりと云ひ して、 ふるに、 又、生産財の效用高ければ、 して利子歩合が貸借せられざる生 借 其價格も自ら高く、 所謂資本(生産財)に非ざるを せらる のみに於て利子の高低を 依りて定まるものなりと 如何となれ いものは貨幣又は貨幣 財を需用する者は必 Ilij 償は其需用と かも此際に ば 從つて其 生產 利子 於

> 奈何せん。 んち 常に資金の借入者ならば、ニコル 同時に生産財の販賣者たり、 企業家も亦生産 者のみに非 一面の眞理 億するを要するなり。 實業界の實狀は氏の論據を支持せざる ずして、自己所 を傳ふるものなりと云ふを得べけ 财 の購入者たることあるの事 資金の供給者 有の資金を利 生産財の購買者が ソ ンの利子論 が悉

31 幣の使用に對して支拂はるゝ利子の歩合は貨幣 狀態、 0) の説は勿論不正確に非ず。 景氣に依りて定まるものなり 在り。 する貨幣の要求權の關係を看過したる 貨幣貸借上の利子歩合 せるのみ。 銀行 と供給でに依りて定まるも 唯其缺點をも看做す可きは利子歩合に使給さに依りて定まるものなりと言ふ の支排準 從つて貸付に對する され 備金の過不足並に商業界 鬼に角ニコ が實業界に於け 此説を約言せば、 <u>ک</u> = = ルソ ルソン ン 0) 3 K 事 加は 貨氏の崩

非ずや。 步合 ば資本の利子で貨幣の利子との二種に分類し、 しは、 は 狸の 推論を下だすに至らざり 貨幣の數量が常に總ての貸借に 1,7 吾人は上 出後點を誤りたる放なる可し。 幣叉は貨 大影響 蓋し氏が此明白なる原則 して、 て然らば、 一幣の代用物を通じて行 文に於て指 を及ばす可きは自明の 全體の利用 流がるが し 子 歩合に關して同 か 0 を看 て金銭 如く利子を 於 理なるに、 いはるう以 Ø ソ せざり ン の貸 はる

をば他 影響 ૪ = 0) コ ン 即ち是れなりです。 物價を通じて利子歩合に及ぼす貨幣數量 0) は依然として折衷説を採 ソ 方面より ン 兀 は更に貨幣と利子歩合との せんとせり。 採れり 心したても二 其大要は 他の方 7

物價の高低と利子歩合との高低との間には

の流 ある際 あり 流通の下に於て最も さを得可し。 得るを以てなり。 るなり。 通を假定せば最も明瞭に之を説明するこ 此物價對利子步合の關係は不換紙 利子歩合が其影響を蒙なることあ きときに利子歩合の高きことも 蓝 し物質變動の結果は不換紙幣 著しく之を認む 價の變動し 3 ことを つ

諸桃に充てられたるが為め C 假り し。されど、吾人 物質が の騰貴すると共に利子歩合も の資金を増加 ば 21 不換紙幣が 行に對して貸付 物價は騰貴し商業は從つて 接其の影響を蒙りたりとせよ。 政府 せざるを以て、 の假定せる紙幣 政府に 办 を要求する者増加す 依 國内に りて發行 行に 昻 の發行は金 散 騰す 場合には して 刺 布 せられ 戦せ せら

可し。
しめなば、利子歩合は下落し、物價は騰貴すと發行し、銀行が之を商人に貸付けて流通せ

於ける金融逼迫せり 落が からず。 ば金の價値 を騰貴 若し之に反して、 取引を刺戟せば、 幣と化して 發見された 更に物價 のなりとせば、 大金鑛發見 中に落ちるとせば、 利子歩合も一時下 せし z 0) 個が騰貴せし場合に、は個が一般に下落せし際 して 地に る金銭 US 利子步合低きや 於ける通貨の收縮の誘致せる 0 之に反して、 此金の新供給 結果を呈す 此金供給の より發掘せ 果も っとせば、 下落せし際 市心地 当省ので、若し物價の下 物合に、若し物價の下 路せし際に、換言すれ、 下落するに相違なし。 つて 0 可し。 る金 も測り 額が金融業者 行 されど、 8利子步合 1-直 知る可 於て ちに貨 新 P たに は

政府が紙幣を發行してなる可し。云々

2 て其中難分かを銀行に預け、 らん。 或は二氏の推定せるが如き結果を呈することあ として紙幣 間に流通して銀行に預入せらるゝことなければ 布せられたる紙 用膨脹するに至る とせば、 共預 7  $\mathcal{T}$ 可しと斷ずるは早計ならずや。 j され されど、 行に當座預金として預入するとせ 金は早晩引出さる可き性質のもの 商人が其代金として政府より受納せる紙 かき 物價騰 を受領 是れ 現金 幣 せる者が し最初政府より俸 の全部 を以て 可さはニコ し 加を圖るに至らん。  $\mathcal{T}$ 7 が商人並に消費者 其全部を費消せずし ちに は 叉物品 ルソ 子 ン氏の言の 3 j を政府に上 給又は手當 歩合が 國 資金 なりと 者し ば 内に散上騰 7 0)

及ばす 貴す まる 民 = もの = 0 企業心 する 一叙の紙 なりとす。 と云ふ能はざるなり ソ ・並に其別落心の せるを以 行の影響は 断せるが如く、必られて、利子歩合は中 方に於 厚 蓋し利子 一薄等に依 T 必ず の程度 少合に 0 (=

接銀行 致するの傾向 C = 次に 騰貴す可し。 jV. 金貨の ソ KC 交附せられ 氏の 企業の刺戟は ン R 假定 の論せるが を有するものなるを以て、 最後にニコル されざ、 せるが たりさ するに 企業資金需用の膨 \$1 如く下落 加 物價 世 < んか、終 至る可きことを忘 ソン氏の論及せる の騰貴 Ļ 利子 の全部 物價は次 全部が直 は 脹を誘 企業を 一旦低 3

担了。J. Shield Nicholson; Elements of Poltical Econom 1903, pp. 311-320.

掘11、Ibid., p. 324

第六款 ハドレイの説

貨の膨脹は利子歩合を左右することなしと力説 に於て利子步合は概 見解 77 V 1 りて定まるものなりと論断し、(註、一)通 を持せるもの 指の理論經濟學者なる も亦 ~(誰ご) 如如 對利子の て資本(生産財)の需用供 し。 問題に就きて折 氏は其著『經濟學 ٦.

り。(註二)氏日 之に 從つて騰 欲する者 題じて變動せん。若し通貨膨脹し。 資の數量にして增減せば、物價も 賞せば、 其食物、 一定數の勞働者を雇 或る 從つて 器械又は 一定量の食 資本に對す 額 0 物 貨幣を借入 が確せんと 又は し物質 の供 B 5 給を

其供給の増 加するに連 れ膨脹 するものなりと

に適ひ 注意に値ひする現象は金融の逼迫を救濟す此原則の例外と看做す可きものにして吾人 於て之を概るのみ』と。 たる方法 を以て紙幣を増發せしとき

膨脹す ときに於ても を蒙るものなりとせば、 若し金融逼迫の際に利子歩合が通貨伸縮の影響 旣にフ氏の說を批評せる際に指摘せるが如く、 フィシ 總長は普通の場合に於て流通貨幣の數量增加 外として認めたるなり。 服 せばい 貨幣説を採れるも、金融逼迫の際に通貨がちハドレイ氏は利子對貨幣の問題に就きて P きに 利子歩合の低落することある可含を 教授の主張と符節を合するが如し。 同一の現象を呈せざるや。ハドレ þ 物價騰貴せば、 利子步合は何等の影響を蒙 何故に金融の緩慢なる 此點に於て氏の説は 資金の需

> 精密に講述す可きに非ずや。 利子歩合より重要に 歩合はハドレイ民一派の説明せんとせる永久的 象は常時發生しつゝあるものに非ずや。 るに過ぎずと云は せるが如 して然りとせば、 資金の需用は同比例に増加するものに非ず。 云ふ能はざるなり。 つて其際に於て利子 に一様に騰貴せざるが故に、 ることなしど論 物價は通貨の膨脹するや否や 或る場合には所謂一時的利子 ん。 して、 論者或は是れ一時的現象た されど、 合が低落することなしと 後者より 通貨の膨脹と共に 此所謂一時的現 が既に再 も寧ろ之に 若し果 Ξ 值 5

Ibid., pp 229-30. Twining Hadley; Economics.

Ibid., p. 277.

『經濟原理』に 米國コロンビャ大學教授セリグ 第七款 於て各學派の長を採り ·b y 15 7 ~ 0) 7 って他の短を、ン氏は其著

を説明 3 見地に め して曰く、(註、一) 立ちて之を講究せり。 3 吾人の研 して經濟の學理を解 究問 趣に 氏は利子 就 3 T 8

0 與に對して支拂はるゝ報償と看做せるも、 3 代表せる資本(生産財)の使用 5 は然らずして、 素 と思惟せると同じく、 人は富を以て一定額の貨幣より うものに外ならず」と。 (生産財)の使用に對し利子は貸與せられた 刹子をば貨幣 して支排れたる貨幣 成 るも 0 事貨の

と重要なる關係を有せることを認め るゝ資本(生産財)の需用と供給とに依 縮の影響に セリ 亦多數經濟學者の支持せる學說を奉せり。 のなりと。 グ を採れるが、利子歩合の決定に就さてマン氏は斯くの如く利子の本質に就さ 普通の利子は生産の目的に利用せら 關して氏は貨幣の數量が されど、 ること を認め たり。 氏は貨幣の敷量が利子歩合、利子歩合に及ぼす通貨 b て定ま 日

るとせば、 され 騰落は 競爭の結果其請求に應せざるを得ざる可し。 或は長期間の勞働に服せざる可からず。・・・・・ し。 場合に於けるよ する爲めには物價が下落せざりしと假定せる の金員を借入るれば、 下を要求 へば、 b 事質多額 換言す ば 利 行者間 \_\_\_ 物價 若し物價の下落をト 時的に利子に影響を及ばすことあ 且つ物價の將來に 借助を爲さんと欲する者は利子の n の低落 ば のものを返却することとなる可 0 質に合致するとせば、 び借財者 失を発れんと圖り、 りも多量の貨物を賣却するか 低落に依 名目上同額の一千弗を返濟 しつうあるときに一千郎 決濟期に h 間に於て競爭が 当する各當事者の て全然相 知することを得 は借用 貸付者も でもるよ の下 艏

全に行はるゝことなきが故に、 らん。 して貨幣の購買力の變動に全然適合すること 幣 なら しら云々。 論するとせば、 ある際に於ても之と同 5 然りと雖も、上記の競爭で豫想とは完値の低落率よりも稍々高く昂騰するな 利子歩合の低落は物價の下 かる可 複利法を用ひ じく 利子歩合が決 利子歩合は の勝貴 理的 U

定まる 、現金に換へ得る且つ常に其現在量の増減して むことなき融通資本の需用と供給とに 更に「コ セリグマン教授は貨幣數量の影響を認めた 日く、(註、四)。コ ものなりと。 1 この貸借に於ける利子歩合 W 느 の利子歩合は 依 17 直ち 就き 6 T.

より 貨借との二種に分ち、 さの二種に分ち、後者の利子歩合は通貨質借をは長期の普通貸借と『コール』の如観之、セリグマン氏は利子歩合研究の立

貸借の利子歩合が通貨の伸縮に依りて左右せら 亦同一の影響を蒙らざるや。 賃借の利子歩合が るうならば、 して利子歩合變動の理を説述せざりしを惜まず が百尺竿頭更に一歩を進めて全然貨幣を中心と 之に對して秋波を送れるものなるが 貨幣數量の増減に依り んばあらず。 迎せるも、 る可からず。 動することあ ことなき いことあらば、 S X 貨幣說 何故に -12 若し氏の認めたるが如く『コ b 氏は非貨幣説を出發點とし と論ずるも 何故に長期貸借に於ける金利 貨幣の數量に依りて左右せら の有力なるを否定し得ずし 他の短期貨借の利子少合も て根本 に接近せりと云はざ 若し總ての短期の 於ける利子步 0 的には左右せらる 騰落を通じで縁 7 3 吾人は氏 此說 借さ云ひ て論 合は は IV 7

8 じて貨幣數量伸縮の影響を受くるとあるを認め 人はセ教授が此點 果して然らば、 を蒙 は長期貸借の利子歩合が物價 物價は常に變動して止まざるものに非 2 迄其推論を進めざ りと云はざる 利子歩合は常に通貨伸縮 からず。 の騰落 りしを遺憾 を通

Edwin R. A ď Principles 앍 Economics

5 th ed., 1912, F 提川、Ibid., p. 395 提川、Ibid., p. 574 提回、Ibid., P. 395

### 第八款 0 說

決定に 氏と殆んど同一の説 のに依 『貨物の 紐育大學教授ジョ 就き論じて りて定まるが 價格が所謂限界又は最終效用なるも 日 を採れり。 如く、利子歩合も資本(生 く、(註、二) ンソン氏 氏は利子 しも亦と y 步 1 合

に依りて定まるものなり

台對通貨の とす。 は即 5 問題に關 説的見地に に立ちて、 く断定せり。(註 利子步

の流通高は利子歩合と何等の關係を有せず。 ~(誰、三) 物價の騰落 つゝある際を除さては、 貨幣

定まるものに非ざると同じく、 に非ざるなり 保ち、 せば、 るの趨勢を有するならん。』の需用が同時に減退せざれ 貨物の價格が其の限界又は最終效用に依 『貨幣の流通が も生産財の限界生産力に依り 利子步合 交貨幣の流通が されど、 は其間 減退せざれば、 此利子決定の根本原則 暫く低落するの 脹して其の需用 一時收縮せる際に、 利子歩合も亦必 金利は て定まるもの に超過 傾向 腦貴 りて

ソン

Æ,

が通貨の

膨脹が利子

歩合をア

は他の機會に

之を譲らんと欲す。

に批評を加ふるの必要なかる可し。 折衷論者と同じく其關係 的に左右す のなるの ることあることを認めながら、 一事を看過せしことに就きては弦 が常に存在 しつゝ あ

Joseph French Johnson; Money and

Ibid., p. 146.

Ibid., p. 147.

### 第九款 Ÿ 1 の説

像され得るも、事質は然らずして、折衷說を採歩合論に於ても亦貨幣說を支持せるならんと想 能、二 換言 又は貨幣の代用物を通じて行はるゝ 同じく貸借の本質な 欧國の經濟學者ジェ 我目〉(据、二) n ? ] ばジ 貸借の本質論に於ては貨幣説を採れ 1, 氏が此 ド氏の説に ド氏もデブン 見地に立てる上は、 依れば、 貸借は ものなりと 利子 貨幣 b

『資本は常に 貨幣の形式にて供給せらる

> 即ち のなるを以て、 りと思はされざるに非ざるのみならず、 が流通貨幣 ž 流通貨幣の一般人士間 の敷量に の膨脹せるときに同に於ける通説に 利子步合、 依り て定まる可 即ち資本の賃貸料 さには利子歩合低のたるなり。日 きものな 是れ

利子との間になるを以て、 利子も 借に就きて云へば正鵠を得たるも 歩合に適用することを得ず。 す。・・・・・されど、こは普通の長期貸借の利子 を與ふる一 此説は割引の形式を以て行は の如 く此兩基數に對して同 貨幣の ればなり。 同に於ける比率が貨幣し、利子步合、換言な 原因の爲めに左右せらるゝ 形式に於て授受せらる 20%ででいば、元金と方て投受せらるこもの 蓋し元金は勿論 一時に同様の影響 幣の購買力の變 3 3 0) 短期の貸 なり **\$**5 如き 8

短期貸借の利子歩合に及ばす通貨伸縮の影是觀之、ジード教授はセリグマン氏等で同

説を採 ればな を以て直ちに利子歩合が何等の影響を蒙ること買力を一割宛失ふ可さは自明の理なるも、是れ 落を通 伸縮を誘致し、 購買力 なしと断ずるは早計なり 利子として支拂はるゝ貨幣とが共に均 るも とをも否定せり。 假りに一割減少せりとせんか、 ン教授の論述せる所に比して一 のなりと云はざる可からず。 の變動、 其結果として金利を騰落せしむることあ じて金利を變動せ れるのみならず、 企業の仲 換言すれば物價の變動は企業の 三事に 0 縮は資金需用の増減を 於て氏の説は 如何となれ むることある 貨の伸縮が物價の騰 きて 貸借 貨幣の購買力 大遜色を有す ば貨幣の しく其購 の元金と セリグ 可参うこ

Charles Gide; Principes d'économie politique, lame